ジルベール・シモンドンとジル・ドゥルーズの「特異性」の概念
―「情報」の形而上学的な問い直しのために―

The notion of “singularity” in Simondon and Deleuze:
A way of rethinking “information” metaphysically

堀江　郁智*
Ikutomo Horie

はじめに

ジルベール・シモンドン（1924-1989）は、20世紀後半において最も重要なフランスの哲学者のうちの1人であり、その技術哲学と個体化論によって名を知られている。一方で、シモンドンの哲学は、技術哲学の領域において一定の受容を見ており、その主要な業績は1958年に国家博士論文の副論文（以下、博士副論文と記す）として提出され、後に『技術的対象の存在様態について』*Du mode d'existence des objets techniques*と題されて出版されている。他方で、シモンドンの哲学のもう1つの軸として個体化論が存在しており、その哲学は、同年に国家博士論文の主論文（以下、博士主論文と記す）として提出され、死後に刊行された『形態と情報の概念に照合された個体化』*L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information*において結晶する。本稿で、ジル・ドゥルーズ（1925-1995）の哲学との関係において取り上げるのは、後者の博士主論文である。

これまで、ジル・ドゥルーズによる賞賛を主たる例外として、シモンドンの個体化論は長年にわたって過小評価されてきた。しかし、今日、シモンドンの個体化論は、様々な隣接領域において関心を引いている。とりわけエピステモロジー、存在論、政治哲学、自然哲学、そして技術哲学の分野において、シモンドンの再評価は着々と進んでいる。実際に、この再評価を受けて、シモンドンの死後、シモンドンの著作や講義録、あるいはシモンドン研究の著作が相次いで刊行され始める[1]。こうしたフランス哲学界におけるシモンドン復権の潮流は、「シモンドン・ルネサンス」と一括りに呼ばれることもある[2]。

本稿の目的は、「特異性singularité」の概念に焦点を当てることで、シモンドンの個体化論とドゥルーズの個体化論の間の差異を明確化することである。本稿でドゥルーズの議論を経由してシモンドンの議論を検討する理由としては、以下の3点が挙げられる。まず先述のよう

* 東京大学大学院学際情報学府博士課程
キーワード：ジルベール・シモンドン、ジル・ドゥルーズ、特異性、前個体性、情報

に、彼は当時からシモンドンの哲学の重要性を理解していた数少ない哲学者であるという点、次に両者とも当時の自然諸科学の先端的な議論に多大な影響を受けている点、さらに両者とも形而上学的な色彩の強い個体化をめぐる議論を展開している点である。最後の点に関しては、事実、ドゥルーズの差異哲学がスピノザ、ライプニッツ、ヒューム、カント、ニーチェ、ベルクソンなどのメジャーな哲学者からだけではなく、シモンドン、レイモン・リュイエ（1902-1987）、アルベール・ロトマン（1908-1944）ら比較的マイナーな哲学者からも影響を受けているという鋭い指摘が存在する[3]。こうしたなかで、ドゥルーズのシモンドン読解に注目する動きは、近年は英語圏でも広まりつつある[4]。

さらに、本稿が「特異性」の概念に注目するのは、この概念が両者の個体化論を結びつける蝶番の位置にあると同時に、両者の議論の差異を判明に照らし出すうえで重要な役割を果たすと考えられるからである[5]。現に、ドゥルーズは、「ジルベール・シモンドン 個体とその物理-生物学的な発生Gilbert Simondon, *L'individu et sa genèse physico-biologique*」と題された1966年の書評において、シモンドンの主張の重要性は「特異性」と「個体性individualité」を厳密に区別した点にあると述べている[6]。このドゥルーズによるシモンドン読解は、長年にわたって博士主論文の全体が刊行されることのなかったシモンドンの個体化論の解釈を一定の範囲で方向づけたと考えられる。

それゆえ、本稿はこのドゥルーズの書評に依拠することで、ドゥルーズがシモンドンによる「特異性」についての説明をどのように理解したのかということを考察する。本稿では最初に、シモンドンの個体化論において「前-個体的なもの」と「特異性」の概念が中心的な役割を果たしていることを示す。次に、ドゥルーズの書評の記述にもかかわらず、シモンドンは博士主論文において「特異性」と「個体性」を明確には区別していないという仮説を提示する。最終的に、ドゥルーズが「前-個体性pré-individualitéとしての特異性」に議論の重点を置くことで新たな問題系を開いているのに対して、シモンドンの議論には「情報informationとしての特異性」と呼べるものが存在しており、情報の概念を形而上学的に問い直すための重要な視座を提供していると示唆することをもって本稿の結論とする。

1. シモンドンの個体化論における「前−個体的なもの」と「特異性」の概念

1.1 「前−個体的なもの」を出発点とした「個体化の作用」

シモンドンはその博士主論文の冒頭において、「個体としての存在の実在réalitéに接近することのできる2つの手段がある」[7]と述べている。すなわち、原子論的実体論substantialisme atomisteと質料形相論hylémorphismeという2つの学説である。ところが、直後に続く論述によって明らかにされるように、シモンドンによれば、これら2つの学説は「個体としての存

在の実在」を把握するという当初の目的にとって不十分である。というのも、前者においてはあらゆる事物が「原子atome」の不可分で統一的な微粒子の偶然に満ちた出会いへと還元されるからであり、後者においては「個体化の作用opération d'individuation」が「形相forme」と「質料matière」という両極的な2つの項の結合へと還元されるからである[8]。確かに「個体化の原理principe d'individuation」が、前者にとっては「原子」の偶然の出会いの結果から遡ることで見出されるのに対して、後者にとっては「質料」あるいは「形相」にあらかじめ含まれているという違いはある[9]。それでも、前者は「原子」、後者は「形質結合体」という「構成された個体に存在論的な特権を与えている」[10]という共通点がある（強調、原著者）。したがって、これら2つの学説では、存在の「それ自身に対して相をずらし、また相をずらしながら自ら解決する能力」[11]、つまり「個体発生ontogénèse」の能力を把握することができないと見なされる。

それに対して、シモンドンは「個体から出発して個体化を認識するというよりはむしろ、個体化を通して個体を認識する」[12]ことを目的に据える（強調、原著者）。つまり、シモンドンは、先述の両学説のように何らかの「個体化の原理」に基づいて「個体化の作用」を説明するのではなく、「個体化の作用」の中心に「個体発生」の力能を捉えることを学的姿勢とする。またこの時、シモンドンは「構成された個体」に与えられた特権的な地位を相対化するために、「前-個体的な実在réalité pré-individuelle」と呼ばれるものを前提する。

> われわれは、個体が存在し始める出発点となる、そして個体がその諸性質のうちに展開、体制、最後に諸様態を反映する個体化の作用を第一義的なものとして見なすことで、個体化の原理の探究において事を一変させる必要があることを示したい。その時、個体は相対的な実在réalité relativeとして捉えられるだろう。つまり、個体は、それ以前に前-個体的な実在を前提とし、個体化の以後であっても単独では現存しないような存在の特定の相として捉えられるだろう[13]。

こうして、シモンドンは「個体化の原理」の探究を一からやり直そうとする。その探究においては「個体化の作用」こそが、第一義的なのである。そしてその探究の出発点となるのが、個体の以前に「前-個体的な実在」があり、すなわち「前-個体的なものle pré-individuel」が実在し、「個体化の作用」の以後も個体とその相関項としての「環境milieu」が共存するという前提である[14]。そこでは、個体は、「存在の特定の相」でしかありえず、それ単独では決して存在することのないものとして把握される[15]。

確かに、シモンドンは準安定的平衡、ポテンシャルエネルギー、膜、良い形態、送信機、受信機といった用語をはじめとして、熱力学、分子生物学、ゲシュタルト心理学、サイバネティクス、情報理論などの当時に隆盛していた諸科学の語彙を用いることで、野心的にも物理、生命、心理、社会の4つの領域に渡る壮大な個体化論の構築を試みている[16]。しかし、一見して大規模な理論の基盤にあるのは、西洋の形而上

学において長い系譜を持つ、「個体化の原理」に基づいて個体を把握する立場への徹底的な批判である。最終的に、シモンドンは、2つの伝統的な個体観が陥っている共通のアポリアを鮮やかに指摘し、そのアポリアを乗り越えるものとして「前-個体的なもの」と個体の組が生成される「個体化の作用」という考え方を提示している。

1.2 「内的共鳴」の発端としての「特異性」

また、シモンドンの個体化論を特徴づけるもう1つの鍵概念として、「特異性singularité」という用語がある。この用語について具体的な説明が行われるのは、博士主論文の第1部第1章においてである。シモンドンはこの箇所で、レンガ鋳造の事例に着目することで、「生の質料」と「幾何学的な形相」という抽象的なものに代わって、「準備された素材matière préparée」と「物質化された形態forme matérialisée」という具体的なものを思考するに至ったその過程を詳らかにしている。レンガ鋳造の事例は、三極真空管の事例と結晶化の事例とともに、シモンドンの「物理的個体化individuation physique」に関する議論において中心的な位置を占めている事例のうちの1つである。また、この3つの事例のなかでも、レンガ鋳造の事例は技術的操作による「成型prise de forme」の事例でもある点で、博士副論文で展開される技術哲学の内容とも密接に関連しているため重要である。シモンドンは、具体的な1つのレンガが1つの個体でありうるための条件を以下のように記述している。

> 具体的なレンガは、粘土の可塑性と平行六面体の結合から生じるのではない。平行六面体の1つのレンガが、つまり現実に存在する1つの個体がありうるためには、効力のある技術的操作*opération*が、粘土の明確な塊masseと平行六面体の観念notionの間にある媒介médiationを創設する必要がある（強調、原著者）[17]。

この箇所で、はじめて粘土の塊と平行六面体の観念とを結びつける「媒介」が問題化される。換言すれば、具体的なレンガを思考するためには、技術的操作によって打ち立てられる「媒介」を考慮に入れなければならない。しかし、この「媒介」とはどのような事態を指し示しているのか。それは、シモンドンによれば、「粘土の準備」と「鋳型の構成」のように、「生の粘土と課される幾何学的な形相の間の能動的な媒介」である[18]。

同時に、この「能動的な媒介」によって、「生の粘土」は単なる「生の質料」ではなくなり、「平行六面体の観念」は単なる「幾何学的な形相」ではなくなるとされる。つまり、シモンドンは前者を「準備された素材」として、後者を「物質化された形態」として捉え返している[19]。こうした理由を受けて、成型の技術的操作が築き上げる真の関係は「生の質料と純粋な形相の間ではなく、準備された素材と物質化された形態の間に確立される」[20]と主張される。

加えて、この技術的操作によって具体化された関係は、実体的で不可分な項から成る

のではなく、異質な「大きさの次元ordre de grandeur」から構成されていると考えられる[21]。シモンドンは、異質な「大きさの次元」の間に相互作用が生起する状態、言い換えれば「準備された素材」が「物質化された形態」を獲得する状態のことを「内的共鳴*résonance interne*」と呼んでいる（強調、原著者）[22]。

さらに、シモンドンによれば、この「内的共鳴」を起動させる因子とされるのが「特異性singularité」である[23]。言い換えれば、シモンドンは、成型の技術的操作の発端となるのは2つの「大きさの次元」の中間にある「特異性」であるとする。そして、「特異性」は中間の次元にあって2つの「大きさの次元」を交流させる。加えて、シモンドンによれば、この中間の次元にある「特異性」とは、「具体的なココトイマ*hic et nunc*の特異性あるいは諸々の特異性」[24]のことである。要するに、シモンドンの個体化論において、レンガ鋳造の事例を始めとする「個体化の作用」には、2つの異質な「大きさの次元」を内的に交流させる具体的なココトイマの「特異性」が伴っていると言えるだろう。

2. ドゥルーズによるシモンドンの個体化論の読解

2.1 「ジルベール・シモンドン 個体とその物理-生物学的な発生」

さて、ドゥルーズは、シモンドンの博士主論文の前半が収められた『個体とその物理-生物学的発生』*L'individu et sa genèse physico-biologique*に対する書評を1966年に発表している。「ジルベール・シモンドン 個体とその物理-生物学的な発生」という表題が付されたその書評において、ドゥルーズはシモンドンの仕事の重要性が個体化の非常に独創的な理論を提示したことにあると指摘している[25]。

書評の内容は、次のように要約できる。ドゥルーズによれば、シモンドンの批判は、第一に伝統的に「個体化の原理」が個体化を「既に構成された個体」に関連づけていること、第二に個体化が個体化の以後、個体化の以前、個体化の上位などあらゆるところに置かれていることに向けられている[26]。そして、ドゥルーズはシモンドンに応じながら、実際には個体はその個体化と同時にしか存在しえないのであり、「個体化の原理」は真に「発生論的なものgénétique」でなければならないとする[27]。さらにドゥルーズは、シモンドンにしたがえば、個体化の前提条件は少なくとも2つの異質な「大きさの次元」から成る「準安定的なシステムsystème métastable」が存在することであると明言する[28]。

また、ドゥルーズは、個体化とはポテンシャルエネルギーを現働化し、諸々の特異性を統合することで、客観的に問題性を孕むシステムの解決を組織化することなのであると言い換える[29]。続けて、この解決は内的共鳴として、情報として考察される必要があると付け加える（強調、原著者）[30]。さらに、シモンドンの分析が2つの中心の周りに展開されているとする[31]。それらは、第一に物理や生命などの個体

化の様々な領域の研究があること、第二に前-個体的なものが「未来の準安定的な状態の源」である個体と連関し続けなければならないことである[32]。ドゥルーズは、シモンドンによって確立された新しい諸概念がきわめて重要であり、シモンドンが練り上げたのはまさに1つの存在論ontologieに他ならないと結論している[33]。

このように、ドゥルーズの書評はシモンドンの個体化論の単なる紹介や注解につきるものではなく、そのなかにすでにドゥルーズ独自の解釈が現われている。換言すれば、そこには、ドゥルーズがシモンドンの個体化論の力点を移動させ、自身の哲学のうちに組み込もうとする姿勢が既に見られる。

2.2 「特異性」と「個体性」の厳密な区別について

ドゥルーズの書評の全体像を把握したうえで、本稿では、その書評の前半に現れる次の記述に焦点を当てる。そこでドゥルーズは、シモンドンの知見の重要性を要約している。

> シモンドンは個体化の前提条件を発見することで、特異性と個体性を厳密に区別している。というのは、準安定的なものは、前-個体的なものとして定義され、現実存在とポテンシャルの再配分に対応する諸々の特異性を完全に備えているからである。［…］個体的であることなく特異であること、それは前-個体的な存在の状態である[34]。

すなわち、ドゥルーズは、シモンドンの知見の重要性が「個体性」と「特異性」を厳密に区別したことにあり、個体的な存在を欠いた「特異性」は「前-個体的な存在」の状態であると指摘している。言い換えれば、ドゥルーズにとってシモンドンの個体化論の卓越性は、彼が「特異性」を「個体性」から鋭く分離したこと、彼が特異性を「前-個体的なもの」であると見なしたことにある。

しかしながら、実際の記述では、シモンドン自身は「前-個体的なもの」に「特異性」の地位を明瞭に与えているわけではなく、むしろ、シモンドンは「個体の水準」において生起する個体化という媒介的な現実に「特異性」の地位を与えているように読める。現に、前節で取り上げたレンガ鋳造の事例への注釈のなかで、彼は次のように述べている。

> この［現働化する］エネルギーは状態のエネルギーではあるが、要素間のシステムのエネルギーでもある。特異性の庇護のもとで、大きさの諸次元の間の交流、形相の原理、個体化の糸口は、まさに個体の水準における諸力の出会いとしての2つの大きさの諸次元の相互作用に存している。媒介する特異性は、ここでは鋳型である[35]。

この箇所で、シモンドンは「特異性の庇護」のもとで、個体化の糸口が「個体の水準」における2つの「大きさの次元」の間の相互作用に認められると述べている。さらに、彼はそうし

た「特異性」のことを「媒介する特異性」と呼んでおり、それはレンガ鋳造という具体的な事例においては鋳型であると付言している。ここでは、個体化は生起する以前の「前-個体的なもの」に「特異性」があるというより、まさに「個体の水準」において、「特異性」が2つの「大きさの次元」の中間で両者を交流させ、内的に共鳴させると言えるだろう。ただし、ここでいう「個体の水準」とは「既に構成された個体」ではなく、「関係の活動activité de la relation」としての個体であることに注意する必要がある[36]。

こうして、シモンドンの実際の記述は、シモンドンの議論がドゥルーズの書評における「特異性」の定義に必ずしも収まるものではないことを示唆していると言える。換言すれば、ドゥルーズによる「シモンドンは個体化の前提条件を発見することで、特異性と個体性を厳密に区別している」[37]という命題は必ずしも真であるとは言えないように思われる。もしそうならば、偽の命題が含まれている以上、ドゥルーズの書評は、シモンドンの実際の論述にとって忠実な紹介や注解であるとは言えないだろう。

3. 「情報としての特異性」と「非人称的で前-個体的な特異性」

3.1 シモンドンにおける「情報としての特異性」

それにもかかわらず、ドゥルーズのシモンドン読解を誤解に基づいたものとして安易に退けることもまた避けなければならない。誤解に基づいたものであることは、その読解に実り豊かな発展可能性がないことを必ずしも意味するのではない。例えば、「存在の一義性」をめぐるドゥルーズによるドゥンス・スコトゥス読解は、誤読であると言われる一方で、すぐれて創造的な誤読であったとも言われている[38]。仮にドゥルーズのシモンドン読解が誤読であったとしても、それが結果的にシモンドンの哲学の可能性を最大限に引き出すものである限り、それはドゥルーズ研究だけではなく、シモンドン研究に対しても重要な手がかりとなるように思われる。

問題の在り処を明確にするために、シモンドンの論述をより詳細に検討しよう。先述のように、シモンドンは、博士主論文の第1部第1章で「具体的なココトイマの特異性あるいは諸々の特異性」について触れていた。その前後の文脈は、以下のようなものである。

> 個体化の原理は、ポテンシャルエネルギーの現働化を通じての素材と形態に共通したアラグマティックな作用*opération allagmatique*であると言うことができるだろう。［…］この作用は、具体的なココトイマの特異性あるいは諸々の特異性を拠り所にしており、それらを包み込み、増幅している[39]。

この「アラグマティック」という語は、「変換」や「移り変わり」を意味するギリシャ語の“allagma”に由来するシモンドンの用語であ

る[40]。差し当たり、「個体化の作用」の具体的なココトイマにおける変移的な側面を強調したものとして理解しておけば良いだろう。

とりわけ、ここで特筆すべきなのは、シモンドンがこの一節に対して次のように注記していることである。すなわち、シモンドンによれば、「この現実の諸々の特異性、つまり共通の作用の機会を、情報*information*と名づけることができる」[41]。ここでは、先述した「特異性」の媒介的な性質がより概念的な水準で考えられている。つまり、これらの箇所によれば、諸々の「特異性」は具体的なココトイマにおける「個体化の作用」に存しており、それらの「特異性」は「情報」と呼ばれうる。したがって、私たちはこれらの「特異性」を「情報としての特異性」と呼ぶことができるだろう。

「情報」に関して、本稿の文脈においては次の点も重要である。シモンドンが、「情報」は「個体化の作用」の具体的なココトイマの「特異性」であるのと同様に、「出現しつつある個体の次元における純粋な出来事événement pur」でもあると述べている点である[42]。この記述は、「情報」が2つの側面を持っていることを示唆している。それらのうち1つは具体的なココトイマに関わる側面であり、もう1つは純粋で抽象的な出来事に関わる側面である。すなわち、一方は現実的な側面であり、他方は理念的な側面である。

3.2　ドゥルーズにおける「非人称的で前-個体的な特異性」

この時、シモンドンにおける「情報としての特異性」は、ドゥルーズにおける「特異性」の語の用法と関連があるように見える。別様に言うなら、「特異性」についてのシモンドンの哲学は、ドゥルーズによって誤解されたのではなく、「特異性」についての別の問題系へと変換された可能性が高い。

この連関あるいは変換を理解する鍵は、「出来事」の概念であると考えられる。というのも、『意味の論理学』*Logique du sens*の第1セリーの冒頭で、ドゥルーズは次のように書いているからだ。

> 『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』では、きわめて特殊な事物のカテゴリーが問題となっている。すなわち出来事、純粋な出来事événements pursである[43]。

この一節では、シモンドンの論考にも見られる「純粋な出来事」という語が、別の文脈において取り上げられている。つまり、この「純粋な出来事」は、「アリスがもっと大きくなり、そしてもっと小さくなること」である。それは、生成変化の同時性と相関している。

もちろん、この箇所だけではドゥルーズの哲学における「出来事」あるいは「純粋な出来事」の概念を明らかにすることはできないので、本稿は同書の第9セリーにも焦点を当てる。このセリーにおいて、ドゥルーズはノヴァーリスに言及しながら、2つの出来事を「理念的な出来事」と「現実的で不完全な出来事」にはっきりと区別している。前者は、理念的なプロテスタンティズムのように「本性的に理念的な出来事événement, par nature idéal」である。対照的に、後者は、現実のル

ター主義のように「事物の状態のなかでの空間-時間的実現effectuation spatio-temporelle」である。ただし、ドゥルーズは直ちに後者を「偶発的事故*accident*」という語で言い換えている（強調、原著者）。要するに、ドゥルーズは前者のみを真の「出来事」として認めている。加えてドゥルーズは、前者を「〈唯一の同じ出来事Evénement〉において交流する理念的な特異性singularités idéelles」と言い換えている[44]。別の箇所で、彼はこの「特異性」を「非人称的で前-個体的な特異性singularités impersonnelles et pré-individuelles」とも呼んでいる[45]。

結局のところ、ドゥルーズの「非人称的で前-個体的な特異性」についての議論は、「出来事」の概念を介して、「情報としての特異性」に2つの側面を認めたシモンドンの議論と確かに連関している。ドゥルーズは、現実的で具体的なココトイマの「特異性」についてのシモンドンの議論を退けた後に、理念的で抽象的な「特異性」についてのシモンドンの議論を「非人称的で前-個体的な特異性」として解釈しているように思われる。言い換えれば、ドゥルーズは「情報としての特異性」についてのシモンドンの議論の2つの側面のうち1つを、つまり「純粋な出来事」に関する側面を自身の哲学のなかに取り入れているように見える。くしくも、『意味の論理学』の第15セリーの注において、ドゥルーズはシモンドンを「非人称的で前-個体的な特異性について合理化された初めての理論を提出している」[46]と評価している。このようにして、ドゥルーズはシモンドンの議論のうちの一部を敷衍することで、「非人称的で前-個体的な特異性」の問題系を開いたのだと考えられる。

おわりに

本稿における議論の要点は、「特異性」の概念に関するシモンドンの個体化論とドゥルーズの個体化論の差異であった。まず、本稿はシモンドンの博士主論文を検討することで、シモンドンの個体化論が原子論的実体論と質料形相論という2つの伝統的な個体観への批判の上に成り立っていることを確認した。また、シモンドンの著作に対する書評において、ドゥルーズは実際にシモンドンの知見の大きな重要性を認めていた。ドゥルーズによれば、その重要性は、「特異性」と「個体性」の間の厳密な区別にあった。しかし、シモンドンの実際の論述を検討することで、「特異性」が「関係の活動」としての個体の水準において2つの異質な「大きさの次元」を媒介するものとして考えられている箇所があることが分かった。そして、この箇所は、シモンドンの主張が必ずしもドゥルーズの書評における定義に収まらないことを示唆していた。この点を検討することで、一方でシモンドンの記述には、現実的な側面と理念的な側面という2つの側面を含んでいる「情報としての特異性」が見られること、他方でドゥルーズは、後者の側面を敷衍することで「非人称的で前-個体的な特異性」の問題系を開いているこ

とが推察された。

最終的に、本稿はシモンドンとドゥルーズの議論の差異を検討することで、ドゥルーズがシモンドンの議論の特定の部分、つまり「情報としての特異性」の抽象的で理念的な側面を一般化することで「非人称的で前-個体的な特異性」の問題系を開いていたと結論する。こうしたドゥルーズによる抽象的で理念的な側面を強調する読解の方向性は、ドゥルーズがフェリックス・ガタリ（1930-1992）とともに展開した「抽象機械machine abstraite」の議論においても受け継がれていると考えられる[47]。ドゥルーズのシモンドン読解の独自性は、ドゥルーズ／ガタリの「抽象機械」についての理論とシモンドンの技術的対象の「具体化concrétisation」についての理論との差異に関わっているかもしれない[48]。

また、シモンドンの個体化論において「情報」の概念は、「諸概念の変革」のなかでも中心的な位置を占めるとともに、独自の意味内容が付与されている[49]。シモンドンは、「情報」の概念が「形態」の概念に置き換わるものであり、さらに工学的な用法に還元されるものではないことを強調している[50]。つまり、シモンドンによれば、「情報」を定義するためには、クロード・シャノン（1916-2001）の情報理論における信号のような「量としての情報」でも、ゲシュタルト心理学における「良い形態」のような「質としての情報」でもなく、「強度intensitéとしての情報」と呼ぶことのできるものに注目する必要がある[51]。こうしたシモンドンの学的姿勢は、「情報」の概念を個体化論の視座から根本的に捉え返すための手がかりを提供していると考えられる[52]。「情報」の概念の形而上学的な問い直しのためにも、シモンドンの個体化論の更なる研究の進展が待たれる。

謝辞

本稿は、2014年6月7日に大阪大学で行われた第2回ドゥルーズ・スタディーズ・アジア国際会議における発表“On the notion of "singularity" in Simondon and Deleuze: Pre-individual and information”に大幅な加筆・修正を加えたものである。適切なご助言を頂いた東京大学石田英敬教授、影浦峡教授、青山学院大学ステファニー・クープ准教授、査読者各位に深く感謝いたします。

註

1 シモンドンの死後に出版された主たる著書は、2014年9月時点で次の通りである。まず、単著として、シモンドンの博士主論文を収めた『形態と情報の概念に照合された個体化』がジェローム・ミヨン社から2005年に出版された。次に、講義録として、エリプス社から2004年に『動物と人間に関する2つの講義』が、スイユ社から2005年に『技術における発明――講義と講演』が、トランスパランス社から2006年に『知覚講義』が、2008年に『構想力と発明』が、そして2010年に『コミュニカシオンと情報――講義と講演』が刊行された。さらに、2014年には未刊の論考、講義録、講演原稿、対談録等を集成した『技術について』がフランス大学出版局から刊行された。

2 Cogburnは、『ジルベール・シモンドン――存在とテクノロジー』の書評において、「シモンドン・ルネサンス」が英語圏でも始まる可能性を示唆している。（Cogburn, “Gilbert Simondon: Being and technology”, http://ndpr.nd.edu/news/41310-gilbert-simondon-being-and-technology/）（参照2014/09/22）

3 米虫正巳 「ドゥルーズ哲学のもう一つの系譜について」 小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉 （編） 『ドゥルーズ／ガタリの現在』東京、平凡社、2008、490-512頁。

4 例えば、Williamsは、ドゥルーズの個体化論に対するシモンドンの個体化論の重要性をこれまで過小評価してきたことを認めた

うえで、「いまやシモンドンとともにドゥルーズを読むことが重要である」と読者に訴えている。（Williams, *Gilles Deleuze's* Difference and repetition: *A critical introduction and guide,* Edinburgh: Edinburgh University Press, 2003, pp. 231-232）また、この点については、シモンドンの読者としてのドゥルーズ像を浮き彫りしたBowdenの論考が参考になる（Bowden, “Gilles Deleuze, a reader of Gilbert Simondon” Boever, Murray, Roffe and Woodward （dir.）, *Gilbert Simondon: Being and technology,* Edinburgh: Edinburgh University Press, 2012, pp. 135-153）。

5 例えば、Bardinはシモンドンとドゥルーズの「特異性」の概念の間に差異があることを指摘したうえで、前者の「情報」の次元における「特異性」が「歴史的」側面を持つと主張する。（Bardin, « De l'homme à la matière : Pour une « ontologie difficile ». Marx avec Simondon » Barthélémy （dir.）, *Cahiers Simondon n° 5,* Paris: Harmattan, 2013, p. 39, note 1）また、「特異性」の概念を介したシモンドンとドゥルーズの個体化論の比較には廣瀬浩司の論考が参考になる。廣瀬は、ドゥルーズがシモンドンよりも齟齬の存在論的な根源性を認めていると指摘している。（廣瀬浩司 「個体化の作用からアナーキーな超越論的原理へ――シモンドンとドゥルーズ」 『情況』第3期、第4巻第3号、2003、209-224頁）

6 Deleuze, « Gilbert Simondon, *L'individu et sa genèse physico-biologique* » Lapoujade （dir.）, *L'île déserte et autres textes : Textes et entretiens 1953-1974,* Paris: Éditions de minuit, 2002, p. 121. （ドゥルーズ 「ジルベール・シモンドン 個体とその物理-生物的な発生」 三脇康生訳 『無人島 1953-1968』 前田英樹監修、東京、河出書房新社、2003、181頁）

7 Simondon, *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information,* Grenoble: Jérôme Millon, 2005, p. 23.

8 *Ibid*., pp. 23-24.

9 *Ibid*., p. 24.

10 *Ibid*., p. 23.

11 *Ibid*., p. 25.

12 *Ibid*., p. 24.

13 *Ibid*.

14 先の引用箇所に加えて、シモンドンは、個体が相対的な実在である理由として、個体化は一度で「前-個体的な実在のポテンシャル」を使い果たすことはなく、そこから「個体-環境milieu」のペアが出現するということを挙げている。（Ibid., pp. 24-25.）

15 さらに、シモンドンは、「統一性unitéと同一性identitéは、存在の諸々の相のうちの1つにしか、個体化の作用の後の相にしか適応されない」と述べる。（*Ibid*., pp. 25-26.）また、「統一性以上で同一性以上である*plus qu'unité et plus qu'identité*前-個体的な体制」という表現も存在する。（*Ibid*., p. 26.）

16 シモンドンのこうした広範囲にわたる個体化論の構成の背景を成すのは、1960年2月の講演によれば、人間諸科学と心理学における一般理論の不在への危機感である。（Simondon, « Forme, information et potentiels » *Bulletin de la société française de philosophie,* séance du 27 février 1960, tom. 54, 1960, p. 143; *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information,* p. 531.）

17 *Ibid*., p. 40.

18 *Ibid*.

19 *Ibid*., p. 45.

20 *Ibid*.

21 *Ibid*., p. 40. また別の箇所で、シモンドンは「準備された素材」と「物質化された形態」を2つのハーフチェーンにたとえている。「技術的操作は、2つの練り上げられた対象が両立可能な諸性質を持ち、同じ段階にある時、特定の点において出会う2つの変形のハーフチェーンを準備する。」（Ibid., p. 41.）

22 *Ibid*., p. 45.

23 「共鳴は一定の囲いのなかのエネルギーと運動の交換であり、トポロジックに規定された中間の次元の特異性を出発点としたミクロ物理学的な質料とマクロ物理学的なエネルギーの間の交流である。」（*Ibid*.）

24 *Ibid*., p. 48.

25 Deleuze, *op. cit*., p. 120 （ドゥルーズ、前掲論文、179頁）

26 *Ibid*. （同上）

27 *Ibid*. （同上、180頁）

[28] *Ibid.*, p. 121. （同上）

[29] *Ibid.*, p. 122. （同上、182頁）

[30] *Ibid.* （同上、182-183頁）

[31] *Ibid.*, p. 123. （同上、183頁）

[32] *Ibid.*, pp. 123-124. （同上、183-184頁）

[33] *Ibid.*, p. 124. （同上、185頁）

[34] *Ibid.*, p. 121. （同上、181頁）

[35] Simondon, *op. cit.*, p. 44, note 5.

[36] 「何より、関係の項としてではなく、関係の活動として個体を把握することができるような視点を発見する必要がある。」（*Ibid.*, p. 63.）

[37] Deleuze, *op. cit.*, p. 121. （ドゥルーズ、前掲論文、181頁）

[38] 熊野純彦 『西洋哲学史 古代から中世へ』 東京、岩波書店、2006、246頁。

[39] Simondon, *op. cit.*, p. 48.

[40] 遠藤繁行 「シモンドンの個体化論に関する研究ノート――個体化の操作および個体化の探究方法としての転導」 『古典力・対話力論集』、第1号、2010、43頁、注12。

[41] Simondon, *op. cit.*, p. 48, note 8.

[42] *Ibid.*, p. 51.

[43] Deleuze, *Logique du sens,* Paris: Éditions de Minuit, 1969, p. 9. （ドゥルーズ 『意味の論理学 （上）』 小泉義之訳、東京、河出書房新社、2007、13頁）

[44] 本段落のここまでは、次の箇所を参照している。（*Ibid.*, p. 68. （同上、106頁））

[45] *Ibid.*, p. 178. （同上、265頁）ただし、『差異と反復』においては「非人称的な個体化」と「前-個体的な特異性」とが区別されていることに注意すべきである。（Deleuze, *Différence et répétition,* Paris: Presses Universitaires de France, 1968, p. 355.（ドゥルーズ 『差異と反復 （下）』 財津理訳、東京、河出書房新社、2007、283頁））

[46] Deleuze, *Logique du sens,* p. 126, note 3. （ドゥルーズ 『意味の論理学 （上）』 196-197頁、注3）

[47] Deleuze et Guattari, *L'anti-Œdipe,* Paris: Éditions de Minuit, 1972. （ドゥルーズ／ガタリ 『アンチ・オイディプス』 宇野邦一訳、東京、河出書房新社、1986）また、ドゥルーズ／ガタリも『千のプラトー』でシモンドンへの言及を行っている。（Deleuze et Guattari, *Mille plateaux,* Paris: Éditions de Minuit, 1980, p. 508. （ドゥルーズ／ガタリ 『千のプラトー （下）』 宇野邦一他訳、東京、河出書房新社、2010、123頁））

[48] シモンドンによれば、「具体化」した技術的対象は自然的対象と科学的表象の間を媒介する位置にあり、さらに「具体化」するにつれて技術的対象は自然的対象に類似していく。（Simondon, *Du mode d'existence des objets techniques,* Paris: Aubier, 1958, pp. 46-47.）

[49] Simondon, *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information,* p. 31.

[50] Simondon, *op. cit.*, p. 35. また、橘真一は、シモンドンのinformationの概念の由来をベルクソンの『創造的進化』における製作の主題に、そのなかでもinformer（形態を付与する）という動詞の使用文脈に見ている。（橘真一 「ジルベール・シモンドンにおけるinformationの概念について――ベルクソン受容という背景から照らした考察を中心に」 『年報人間科学』、第33号、2012、99-113頁）（Cf. Bergson, *L'évolution créatrice*, Paris: Presses Universitaires de France, 1907, p. 184. （ベルクソン 『創造的進化』 合田正人・松井久訳、東京、筑摩書房、2010、232-233頁））

[51] Simondon, *op. cit.*, p. 242. 付言すれば、このようにして理解される「情報」は所与の項では決してなく、統一性も同一性もない。反対に、「情報は、2つの不調和な現実の間の緊張であり、2つの不調和な現実がシステムになることのできる次元を個体化の作用が発見する時に現れる意味作用である。」（*Ibid.*, p. 31.）また、博士主論文における「情報」の議論を補うものとして、シモンドン自身の手による次の論考がとりわけ重要である。（Simondon, « L'amplification dans les processus d'information » *Communication et information : Cours et conférences,* édition établie par Nathalie Simondon ; et présentée par Jean-Yves Chateau, Chatou: Éditions de la Transparence, 2010, pp. 157-176.）

[52] この点、ノーバート・ウィーナーが『人間機械論』における「情報の伝送」の議論のなかで1つの個体の「物理的個体性」、

「生物学的個体性」、「精神の個体性」を論じていることは示唆的である。（Wiener, *The human use of human beings: Cybernetics and society,* New York: Da Capo Press, 1988, pp. 101-102.（ウィーナー 『人間機械論』 鎮目恭夫・池原止戈夫訳、東京、みすず書房、2007、105頁））

参考文献

Bardin, Andrea. « De l'homme à la matière : Pour une « ontologie difficile ». Marx avec Simondon » Jean-Hugues Barthélémy （dir.）, *Cahiers Simondon* n° 5, Paris: Harmattan, 2013, pp. 25-43.

Bergson, Henri. *L'évolution créatrice,* Paris: Presses Universitaires de France, 1907.（アンリ・ベルクソン 『創造的進化』 合田正人・松井久訳、東京、筑摩書房、2010）

Bowden, Sean. "Gilles Deleuze, a reader of Gilbert Simondon" De Boever, Arne; Murray, Alex; Roffe, Jon and Woodward, Ashley （dir.）, *Gilbert Simondon: Being and technology*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2012, pp. 135-153.

Cogburn, Jon. "Gilbert Simondon: Being and technology", http://ndpr.nd.edu/news/41310-gilbert-simondon-being-and-technology/.（参照2014/09/22）

Deleuze, Gilles. *Différence et répétition,* Paris: Presses Universitaires de France, 1968.（ジル・ドゥルーズ 『差異と反復 （下）』 財津理訳、東京、河出書房新社、2007）

—. *Logique du sens,* Paris: Éditions de Minuit, 1969.（ジル・ドゥルーズ 『意味の論理学 （上）』 小泉義之訳、東京、河出書房新社、2007）

—. « Gilbert Simondon, *L'individu et sa genèse physico-biologique* » David Lapoujade （dir.）, *L'île déserte et autres textes : Textes et entretiens 1953-1974,* Paris: Éditions de minuit, 2002, pp. 120-124.（ジル・ドゥルーズ 「ジルベール・シモンドン 個体とその物理-生物的な発生」 三脇康生訳 『無人島 1953-1968』 前田英樹監修、東京、河出書房新社、2003、179-186頁）

Deleuze, Gilles et Guattari, Félix, *L'anti-Œdipe,* Paris: Éditions de Minuit, 1972.（ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ 『アンチ・オイディプス』 宇野邦一訳、東京、河出書房新社、1986）

—, *Mille plateaux,* Paris: Éditions de Minuit, 1980.（ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ 『千のプラトー （下）』 宇野邦一他訳、東京、河出書房新社、2010）

Simondon, Gilbert. *Du mode d'existence des objets techniques,* Paris: Aubier, 1958.

—. « Forme, information et potentiels » *Bulletin de la société française de philosophie,* séance du 27 février 1960, tom. 54, 1960, pp. 143-188; *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information,* Grenoble: Jérôme Millon, 2005, pp. 531-551.

—. *L'individu et sa genèse physico-biologique,* Grenoble: Jérôme Millon, 1995.

—. *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information,* Grenoble: Jérôme Millon, 2005.

—. « L'amplification dans les processus d'information » *Communication et information : Cours et conférences, édition* établie par Nathalie Simondon ; et présentée par Jean-Yves Chateau, Chatou: Éditions de la Transparence, 2010, pp. 157-176.

Wiener, Norbert, *The human use of human beings: Cybernetics and society,* New York: Da Capo Press, 1988.（ノーバート・ウィーナー 『人間機械論』 鎮目恭夫・池原止戈夫訳、東京、みすず書房、2007）

Williams, James. *Gilles Deleuze's* Difference and repetition: *A critical introduction and guide,* Edinburgh: Edinburgh University Press, 2003.

遠藤繁行 「シモンドンの個体化論に関する研究ノート——個体化の操作および個体化の探究方法としての転導」 『古典力・対話力論集』、第1号、2010、39-52頁。

廣瀬浩司 「個体化の作用からアナーキーな超越論的原理へ——シモンドンとドゥルーズ」 『情況』第3期、第4巻第3号、2003、209-224頁。

米虫正巳 「ドゥルーズ哲学のもう一つの系譜について」 小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉 （編） 『ドゥルーズ／ガタリの現在』 東京、平凡社、2008、490-512頁。

熊野純彦 『西洋哲学史 古代から中世へ』 東京、岩波書店、2006。

橘真一 「ジルベール・シモンドンにおけるinformationの概念について——ベルクソン受容という背景から照らした考察を中心に」 『年報人間科学』、第33号、2012、99-113頁。

堀江　郁智（ほりえ・いくとも）

［**生年月**］1989 年 1 月生まれ
［**出身大学または最終学歴**］東京大学大学院学際情報学府修士課程修了
［**専攻領域**］フランス現代思想、技術哲学、形而上学
［**主たる著書・論文（3 本まで、タイトル・発行誌名あるいは発行機関名）**］
修士論文「ジルベール・シモンドンの個体化論における〈特異性 - 普遍性〉問題の考察 ―information と transduction の概念を手がかりに―」
［**所属**］東京大学大学院学際情報学府
［**所属学会**］日仏哲学会、表象文化論学会

The notion of “singularity” in Simondon and Deleuze: A way of rethinking “information” metaphysically

Ikutomo Horie*

Abstract

Gilbert Simondon, one of the most significant French philosophers of the latter half of the 20th century, has long been underestimated, primarily owing to the difficulty of Simondon's thought on individuation. The sole exception to this lack of recognition was the praise of Simondon's work by Gilles Deleuze. Recently, however, Simondon's thought on individuation has attracted attention in various domains, particularly epistemology, ontology, political philosophy, the philosophy of nature and the philosophy of technique. The purpose of this paper is to clarify the difference between Simondon's theory of individuation and Deleuze's theory of individuation, by focusing on the notion of “singularity”.

Simondon is best known for his philosophy of technique and his theory of individuation. He discussed the former in his complementary doctoral thesis titled *Du mode d'existence des objets techniques* (On the mode of existence of technical objects), and the latter in his main doctoral thesis titled *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information* (Individuation in light of the notions of form and information). This paper focuses chiefly on the latter, referring also to Deleuze's theory of individuation.

In the Introduction of Simondon's main thesis, the central issue is a critique of two classical doctrines concerning the notion of the individual, namely atomist substantialism and hylomorphism. According to Simondon, the individual is a certain phase of being that results from the operation of individuation, which starts from the “pre-individual being”, the regime before the individual. Through the process of examining his theory, this paper shows that Simondon grasps an individuation not as a union of “raw matter” and “geometric form” but as an “internal resonance” between “prepared matter” and “materialized form” via singularity in the concrete here and now.

Incidentally, in his book review titled “Gilbert Simondon, *L'individu et sa genèse physico-*

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies the University of Tokyo

Key Words：Gilbert Simondon, Gilles Deleuze, Singularity, Pre-individuality, Information.

biologique (On Gilbert Simondon)”, Deleuze states that the importance of Simondon's thesis is the rigorous distinction it makes between singularity and individuality. Based on Deleuze's book review, this paper outlines the way Deleuze comprehends Simondon's thought on singularity, and argues that despite Deleuze's evaluation, Simondon does not clearly distinguish between singularity and individuality in his main thesis. In fact, he regards singularity as a mediator between two different orders of magnitude at the level of the individual that is an activity of relation, and this fact appears to raise questions about the validity of Deleuze's book review.

Furthermore, in Simondon's thought, “singularities as information” containing two aspects, namely a real aspect concerning the concrete here and now and also an ideal aspect concerning the “pure event”, exist, while Deleuze opens up the problematic of “impersonal and pre-individual singularities” by generalizing the latter. In fact, Deleuze's discussions of “impersonal and pre-individual singularities” are connected with Simondon's discussions that recognize two aspects in “singularities as information”, via the notion of “event”. This paper suggests that Deleuze stretches the interpretation of one of two aspects of Simondon's discussions of “singularities as information”, namely the ideal one concerning the “pure event”.

Finally, in terms of the differences between their two theories, this paper states tentatively that Deleuze's reading of Simondon's theory of individuation explains the difference between their theory of an “abstract machine” and Simondon's theory of the “concretization” of technical objects, and that Simondon's discussion of the notion of “information” can help us to rethink “information” metaphysically.